

令和5年度第1回廿日市市まち・ひと・しごと創生総合戦略推進会議（要点）

日時：令和5年12月20日（水）
10時00分～12時00分
場所：廿日市市役所7階会議室

1 開会

2 委員紹介

3 座長指名

座長 山川 肖美 委員

4 座長挨拶

コロナ禍の影響で、日常の中でも様々な変化を感じてきたと思う。私自身もコロナ前はICTの活用に躊躇することもあったが、今は授業や会議に欠かせないものになっている。一方で、一番多感な時期に、限られたコミュニティで過ごしてきた高校生や大学生に関しては、多様性に対する恐れや躊躇のようなもの持っていたり、一步踏み出すということに対しての怖さを持っていたりしているようにも見受けられる。このような中であらゆる年代の人が、安心して過ごしていけるようなまちをつくってきたい。

9月にコペンハーゲンに調査に行ったが、そこでは、日常にデジタルが盛り込まれており、ICTに詳しくない人にとっても、デジタル社会が浸透していることが「楽しい、過ごしやすい」「人中心のスマートシティ」となっていると感じた。

価値観が多様化する中で、目指すところとして「人中心のスマートシティ」というのが廿日市で構築され、その上で廿日市らしさというものを今後どういう風につくっていくのかを皆さんと一緒に考えていきたいと思っている。

5 議事

（1）令和4年度廿日市市まち・ひと・しごと創生総合戦略の効果検証結果について

◎事務局 資料1-1説明

◎各委員質問等

【基本目標1】

委員)施策2のKPI「①JA産直市場の売り上げ高」について、令和7年度の目標値をすでに達成しているが、目標値が低いのではないか。

市)目標設定当初は、JA産直市場の「よりん菜」が整備されていなかったが、整備後売り上げが伸びてきた。令和7年度の目標値はあくまでもその当時の状況で設定したものになっている。目標は達成しているが、引き続き売り上げを伸ばしていけるよう、農作物を安定供給できる体制を整えていきたい。次期計画の際には現状に合わせた目標設定にしたい。

委員)施策2のKPI「④漁業生産額」について、実績値は30億で目標は達成しているが、2018年の市の漁獲物・収穫物の販売金額別経営体数をみると、販売金額が5,000万円以上の経営体は20社ほどであり、ほとんどがこの少数の経営体からの売上げだと分かる。しかし、販売金額が100万円以下の経営体が全体の経営体数の約過半数を占めており、今後廿日市市として水産業をどう支援していくのか、何か考えがあったら教えて欲しい。

市)この30億円の大部分を占めているのが牡蠣養殖である。売上げの大きい会社もあれば個人でしている人もおり、支援については漁協を通じて行っている。全体的な考え方になるが、安定した生産をしていくために、漁業環境を良くしていく取組をしているところで、大小にかかわらず支援は行っているところである。

委員)施策2のKPI「⑩産業支援機関等を活用した事業継承成立件数」について、事業継承に悩んでいる事業者は多いと思うが、実績値が少ない。どのような取組をしているのか。

市)令和4年度はしごと共創センターで毎月相談会を開いており、そこで成立した件数の累計を実績値としている。傾向としては、1年後2年後の近い将来の事業継承についての相談より、10年後15年後の相談が多く、直近の成立件数自体は少なくなっている。実際に相談にあたっている県の引継支援センターに、今後の目標の立て方も含めて相談していきたい。

委員)施策2のKPI「⑫産業支援機関等が開催するビジネスフェアへの参加企業数」について、実績値が少ないが、事業者側に意向がないのか、それとも情報が少なく事業者には伝わっていないのか。原因があれば教えてほしい。

市)この数字は中四国ビジネスフェアへの参加企業の数であるが、コロナ禍だったこともあり、数字はあまり伸びていない。広島広域都市圏協議会の支援もあり、そこを通じて出展した場合、出展料が通常より安くなる等の優遇もあるが、申込数自体少なかったため周知が足りなかったと感じる。

【基本目標2】

委員)施策1のKPI「①市の取組を知り、廿日市市に暮らすことに興味・関心がわいた20歳代～40歳代の割合」についての総合分析で、市の公式Instagramを「知らなかった」という回答が91.2%と多くなっているが、どのような周知を行ったのか。

市)市の公式Instagramについては、昨年9月から開始しており、広報やFacebookでの周知に加え、ウェブ広告にも力を入れた。ウェブ広告については、クリック数は若干少なかったが、そこからフォローしてくれる方も一定数いたため、引き続き取り組んでいきたい。

委員)施策2のKPI「現在の地域に住み続けたいと思う市民の割合」についての総合分析では、18歳～29歳で数値が低くなっているとあるが、何か原因はあるのか。

市)明確な原因は分かっていないが、この世代は大学進学、就職、転勤、結婚等様々な要素があると考えられ、転出も多い傾向にある。詳細の要因を調べるにはもう少し調査が必要になってくる。

委員)もし、18歳～29歳の社会動態が社会減であるならば、アンケート項目自体を「10年後に廿日市市に戻ってきたいか」等に変えていく必要もある。

委員)施策1のKPI「②20歳代～40歳代の転入者数」について、目標値には達成していないが転入は増えている。例えば、この層の人たちがどんな人なのか分析はしているのか。

市)18歳～29歳の数値が低くなっているのに関連しているが、やはりこの世代は転出が多くなっている。しかし、30歳～49歳の層になると逆に転入が多くなっている。それに伴い増えているのが、0歳～9歳なので、20代で市外に出た人が、家族をもち、子どもを連れて廿日市市に戻ってきているのではないかと推測できる。

委員)もう少し転出世代の層を詳しく分析し、戦略を立てていけたらいいと思う。

【基本目標3】

委員)KG1の「将来の夢や目標を持っている児童・生徒の割合」についての総合分析で、引き続き施策2のKPI「②ICTを活用した授業を実施している教師の割合」や「③外国人と積極的にコミュニケーションを図りたいと思う児童・生徒の割合」に注力するとあるが、この取組だけでは将来の夢や目標は持てないのではないか。もし他に行っている取組があれば教えて欲しい。

市)将来の夢や目標を持っている児童・生徒の割合については、本市だけではなく全国的にも低下傾向になっている。原因は詳細に分かってはいないが、コロナ禍の影響もあったと考えている。将来の夢や目標を持つ児童・生徒数を増やすための取組について今後考えていかなければならない課題だと感じている。

委員)佐伯中学校では「カタリバ」という授業があり、地元企業の方がきて子ども達と対話をする。その時に「夢や目標があるか」と聞くと、ほとんどの子どもがあると答えてくれる。この活動は佐伯中学校で3年ほど続いているが、島根(益田市)ではまち全体でこういった取組を行っていて、まちが好きになって、このまちで働きたいと思う子が増えていた。このような活動や、対話ができる機会が大事だと感じる。このような取組が子ども達にとって何かの良いきっかけになるし、まち全体で取り組んでいけたらいいと思う。

委員)施策2のKPI「①コミュニティ・スクールの導入校数」について、コミュニティ・スクールとはどういった活動をするのか知りたい。

市)地域と学校の先生で、一つのテーマ(例:その学校でどんな子どもに育てていきたいか)を設定し、対話していく「熟議」という場を設けた。この「熟議」で出た意見を学校側が持ち帰り、学校の運営方針等を来年度に向けて作成し、それを学校運営協議会の中で承認してもらい来年度の学校運営に生かしていくというサイクルでやっていくのがコミュニティ・スクールの大きな流れになっている。

委員)施策2のKPI「②ICTを活用した授業を実施している教師の割合」については、最終的な目標が100%になっており、難しい目標設定だと感じた。学校の先生はICTがないと授業ができないわけではない。ICTを活用しない先生の割合はゼロにならないと考えられるが、学校の先生が絶対にICTを使う仕組み等を構築できれば、割合を100%にすることもできないことはないと思うので、目標や取組について再度考えていく必要があると思う。

【基本目標4】

委員)施策2のKPI「③適切に医療機関を利用できると思う市民の割合」と、施策3のKPI「④地域課題を地域主体で課題解決に向けて取組をしていると思う市民の割合」の実績値が低いように感じる。今後、広島県がJR広島駅の北側に医療機関を集約していく中で、遠隔医療や中間病院との連携のニーズが加速していくと考えられる。そこで、ICTを活用する話が出てくるのではないかと思う。また地域課題の解決については、政令市レベルの話になるが、市民がスマホを使って自分たちの課題解決に向けて取り組んでいるので、今後広島市等でも活用が広がり、広域連携で廿日市にも取り入れたりして地域課題の解決に向けて声を上げられる仕組みを構築できれば、KPIの向上にも繋がっていくのではないかと思う。

(2) 令和4年度デジタル田園都市国家構想交付金活用事業(広島・宮島ゴールデンルートにおけるコンパクトな地域商社事業)の効果検証結果について

◎産業振興課 資料2-1説明

◎各委員質問等

委員)情報発信は基本的にSNSで行っているとのことだが、どのようにフォロワーを増やしているのか、また、フォロワー分析等はしているのか

市)SNSでのキャンペーンや、モニター制度を活用してフォロワー獲得に向けて取り組んでいるが、売上げと結びついていない実態もあるので、今後は細かく分析していきたい。

委員)新しい商品は追加されていくのか。追加することで魅力も増し、参画したい生産者等も増えていくのではないか。

市)ずっと同じままではいけないと思うし、新しい商品を出していくことは必要なことだと思っている。前回の異業種交流会で事業者とマッチングし、今まさにその事業者と新しい商品の試作について話をしているところである。

委員)交付金活用事業として3年間取り組んでみて、自走に結びついているのか。

市)宮島口に商品全種類を販売しているお店があり、自走できる体制を整えている段階である。市としては、本当の意味での自走を願っているが、間接的な支援や、周知等はしていくつもりである。また、マッチングの場の提供なども行い、自走に向けて少しでも力になればと考えている。

委員)自走に向けて、今後は商品開発に力を入れていくのか、それともブランド力向上に力を入れていくのか。

市)自走のためには、商品開発とブランド力向上どちらにも力を入れていかなければならないと考えている。市内の原材料を使って市内で経済を循環させていくというのが最終的な目標である。

◎まとめ

座長)事務局での総合評価Bに対して、推進会議でも評価はBということにしたい。

6 閉会